

III. 慢性疾患児の異常行動調査結果

みどり学園小児病院 石川敬治郎
瀬川秀男

虚弱児施設および国立療養所に入所している慢性疾患児 460 例について資料 2 の異常行動調査表（病院，施設用）を用いて異常行動の調査を行った。調査者は療養所あるいは施設の職員が行ったが，一部は併設養護学校の教師も加った。対象とした慢性疾患はてんかん（16例），心疾患（6例），腎炎・ネフローゼ（94例），気管支喘息（163例），進行性筋ジストロフィー症（76例），その他（105例）であった。

1. 各疾患群別の平均評価点

各疾患別に平均評価点を算出すると，表 1 のようにてんかんが 18.0 と最も高く，進行性筋ジストロフィー症は 2.68 で最も低かった。てんかん児で点数が高かったのは，てんかんのために収容されたといった事が，その背景にあると考えられる。また筋ジスが最低であったのはやはり注目すべき傾向で，筋ジス児の外面にあらわれた行動では問題が少いということは，問題がないということではないことを銘記すべきであろう。

2. 各疾患群別の出現率の高い項目の検討

調査数 460 名でその集計結果から，評価点 1 点以上で 20% をこえた項目を病種別にまとめた。

(1) てんかん群 16 名（男 8，女 8）

26 項目中，20 項目がチェックされて最も問題の多い群であった。また各項目ごとの 1 点以上の出現率をみると，⑥心配性である，④他の子どもとよくケンカをする，⑤他の子どもに嫌われる……の順で，人間関係に問題が多いようであった。

男女差をみると，男子は④他の子どもとよくケンカする。女子は⑥の心配性が出現率が最も高く，人間関係で性差を感じさせられた。

(2) 心疾患群 6 名（男 3，女 3）

11 項目がチェックされた。調査数が少なく，特徴を把握しにくいが出現率が 50% をこえた項目は④他の子どもとよくケンカする。⑦孤立的で自分ひとりで物事をする傾向がある。⑨気分が沈みがちで，よく涙ぐんだりする。⑩指しゃぶりをする。⑭注意が持続しない，となってお

表 1 各疾患別の平均評価点

	てんかん	心疾患	腎ネフ	喘息	筋ジス	その他
N	16	6	94	163	76	105
Total Score	288	32	350	762	204	493
平均	18.0	5.33	3.72	4.67	2.68	4.69

り，個別の問題として共通性があるように思われる。

男女差については，男子では出現率が 66% を越える項目が 4 項目あり，女子は 2 項目チェックされており，男子に問題を持つ子が多い。

(3) 腎炎ネフローゼ群 94 名（男 68，女 26）

9 項目チェックされた。

⑥心配性である。⑦孤立的で自分ひとりでものごとをする傾向がある。⑤他の子どもに嫌われる。⑥よく文句をいい気むずかしいの順でチェックされたが，心配性，よく文句を言う，気むずかしいが本群の特徴のようである。

男女差は，⑥心配性（40%弱）は男女とも高率にチェックされているが，30%以上チェックされた項目は男子は 5 項目，女子は 2 項目であった。

(4) 喘息群 163 名（男 108，女 55）

26 項目中 8 項目がチェックされた。

⑭注意が持続しないが 50% 近くの出現率で，喘息の一つの特徴のようである。

男女差は男子が 13 項目チェックされ，女子は 7 項目であり，男子に問題ある子が多い。

(5) 筋ジス群 76 名（男 59，女 17）

3 項目チェックされた，他の病種より少なかった。

20% 以上の出現率であったのは，④他の子どもとよくケンカする。⑧いらいらとしすぐカッとなる。⑯よく文句をいい気むずかしいの 3 項目であるが人間関係に問題を持っている。

男女差をみると男子はケンカをするが多く，外に心が向うのに対し，女子は内面に向うようである。

表 2 20%以上でチェックされた項目

項目	病種	てんかん	心疾患	腎ネフ	喘息	筋ジス	その他	合計	分計
1		○	○					2	6
2		○	○	○			○	6	6
3		○	○					2	6
4		○	○	○		○	○	6	6
5		○	○	○	○			5	5
6		○	○	○	○		○	6	6
7		○	○	○	○		○	6	6
8		○	○	○	○	○	○	7	7
9		○	○	○	○		○	6	6
10		○	○					1	1
11		○	○					2	2
12		○						1	1
13		○			○		○	4	4
14		○	○	○	○		○	6	6
15					○			0	0
16			○	○		○	○	5	5
17		○						1	1
18		○						1	1
19								0	0
20								0	0
21		○						1	1
22		○						1	1
23		○					○	2	2
24								0	0
25		○						1	1
26								0	0
合計		20	11	9	8	3	11	10	72

(6) その他の疾患 105名(男60,女45)

16項目がチェックされた

⑦孤立的で自分ひとりで物事をする傾向があるが45%と、他の項目に比べて高く現われている。次に⑧いらいらしカッとなるの順になっている。個別に問題を持っているようである。

男女差は男子が13項目チェックされ、女子は6項目と男子の1/2であった。男子に問題を多く持っており、男子は人間関係を広げようとし、女子は心配性が高く現われ、涙ぐむ等女性らしさが現われている。

(7) 各疾患の合計 460名(男306,女154)

10項目がチェックされた。

そのうち出現率の高い項目は、②そわそわと落ちつきがない。⑥心配性であるが40%以上、次いで④他の子どもとよくケンカする。⑭注意が持続しないが38%となっており、病弱児の全体的な特徴を示している。

男女差は男子が10項目、女子が9項目とチェックされており、問題も共通している面があるが男子では②そわそわと落ちつきがない、女子では⑥心配性が高く現われている。

表2は20%以上チェックされた項目であるが、病種6群にわたってチェックされているのは⑧いらいらとしすぐカッとなるの一つであった。筋ジスを除いた病種群では、②そわそわおちつきがない。⑥心配性である。⑦孤立的で自分ひとりで物事をする傾向がある。⑨気分が沈みがちでよく涙ぐんだりする。⑭注意が持続しないがあげられる。

各病種に共通した問題行動があるようだが、病種によってその問題行動の特徴も表われているようであった。

3. まとめ

調査結果を一面的な見方であったが、病虚弱児のかかえている問題、さらにはある程度病種による特徴があることも現われたと考えられる。

慢性疾患児の療育にたずさわる場合、生きぬく力をつけていく観点でのアプローチが重要であると考えられる。

IV. 養護学校教師よりみた慢性疾患入院児の異常行動調査

国立特殊教育総合研究所病弱教育研究部 永 峯 博

小児慢性疾患児が長期入院中、併設の病弱養護学校側からみて、どのような異常行動がみられるかを調査した。

これら多くの長期入院児は、その長期入院のため、自己の身体的疾患による身体的苦痛と運動制限のため、何等かの行動異常が認められ易い状態といえよう。

このような状態の子どもたちに対し、医療側もその対策を考えていかなければならないことは、小児科医が心

身ともに発達していく存在である子どもを対象にしている以上当然のことであろう。

今ここに、小児慢性疾患の精神衛生を考えるにあたり、多くの慢性長期入院児を収容している病院に隣接されていて、その子どもたちの学校教育にたずさわっている病弱養護学校の側からみて、この子どもたちにどのような問題行動があるのかを調査してみた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



虚弱児施設および国立療養所に入所している慢性疾患児 460 例について資料 2 の異常行動調査表(病院,施設用)を用いて異常行動の調査を行った。調査者は療養所あるいは施設の職員が行ったが,一部は併設養護学校の教師も加った。対象とした慢性疾患はてんかん(16 例),心疾患(6 例),腎炎・ネフローゼ(94 例),気管支喘息(163 例),進行性筋ジストロフィー症(76 例),その他(105 例)であった。